人間文化創成科学論叢　第19巻　2016年

日本語母語話者の記述回答にみる「後日の再感謝」の発話行為
―「解釈フレーム」と「コンテクスト化の慣習」を枠組みとして―

市　原　明日香*

Re-thanking for Previous Indebtedness in the Japanese Language:
"Frames of Interpretation" and "Contextualized Conventions" as Theoretical Backgrounds

ICHIHARA Asuka

Abstract

Japanese express gratitude towards a benefactor not only the first time but also when they see him again the next time with expressions such as "*Senjitsu wa doumo* (Thank you for the other day)", "*Kinou wa gochisousama deshita* (Thank you for the meal yesterday)". However, for learners of Japanese as a foreign language it is difficult to understand its meaning and how it should be used. Because in English or in Chinese language it is uncommon to re-thank for something which happened in the past when they meet again. The purpose of this research is to reveal what the speech act is the re-thanking for previous indebtedness in Japanese language.

This investigation adopts two methods. One is the replication study of *Tokugawa* (1993) which included a national survey and cross-national research. The other is a questionnaire survey by open-ended question. The descriptive data are analyzed by KJ method (*Kawakita* 1970). Participants are 50 Japanese native speakers who are university students.

The results are as follows: (1) the frames of interpretation are "custom to be expected" (45%) and "attitude of politeness without forgetting indebtedness" (43%), (2) contextualized conventions are "using for the purpose which build a better relationship." and "using as a speech formula to open a conversation."

Keywords：expression of gratitude, frame, contextualized conventions, Gumperz, KJ method

1．はじめに

日本語では「先日はどうもありがとう」「昨日はごちそうさまでした」といった後日に再会した際の感謝が行われる。本稿ではこれらの表現を「後日の再感謝」と呼ぶ。英語や中国語を母語とする者にとっては、この「後日の再感謝」の習慣がないという（中田1989，李2014）。日本語ではなぜ「後日の再感謝」の発話行為が見られるのだろうか。外国語として日本語を学ぶ学習者にとって、母語と学習言語の語用面での違いを明確に理解することがコミュニケーション上、重要であるが、学習言語の運用のための知識としてどのような説明が適切だろうか。

これまで、日本語の感謝表現については、感謝を示す場面で謝罪表現「すみません」を代用することや、適切なスピーチスタイル、アスペクト（「ありがとうございました」）、語彙の選択や、いわゆる「やりもらい動詞」（「～てくれる」等）について分析されてきた。しかしながら、「後日の再感謝」については、これまで使用の傾向や

キーワード：感謝表現、フレーム、コンテクスト化の慣習、ガンパーズ、KJ法

＊平成27年度生　比較社会文化学専攻

研究者の内省による検討が示されているのみで、日本語を母語とする者が、どのような状況でどのような相手に対し、どう使用するのかといった詳細は明らかにされていない。そこで、本稿は日本語母語話者の「後日の再感謝」を対象に、その特徴を明らかにすることを目的とする。

２．先行研究

２－１．理論的枠組み「解釈フレーム」「コンテクスト化の慣習」

発話行為の語用面でのメタ認識を分析することはどのように可能だろうか。Gumperz（1982）は、異文化間の語用の差異を、「フレーム（frame)」、「コンテクスト化の合図／手がかり（contextualization cues)」、「コンテクスト化の慣習（contextualization conventions)」の概念で明らかにした。本稿ではGumperz（1982）の「フレーム」と「コンテクスト化の慣習」を理論的枠組みとして、「後日の再感謝」という発話行為の解明に取り組む。

まず、フレームとは、Goffman（1974）が示した概念で、研究者によって定義が異なっている[註1]。本稿で言う「解釈フレーム（frames of interpretation)」とは、Gumperz（1982）が述べたような、会話中に行われる「推測」のために参照される社会文化知識（socio-cultural knowledge in conversational inference）のことを言う。言い換えれば、言葉の使用における社会文化的な準拠枠（frame of references）のことである（Gumperz1982：172-186)。それは静的な構造ではなく相互行為の中の動的なプロセスでもあるという（同：131)。この解釈フレームに基づいて、「コンテクスト化の慣習」が共有され、コンテクスト化の慣習と結びついた「コンテクスト化の合図／手がかり」(以下、「コンテクスト化の合図」と記す）が使用されることで会話が成り立つ。「コンテクスト化の合図」とは、話し手がシグナルとして聞き手に送り、聞き手の解釈の手がかりとなる言語学上知られているあらゆるものを含み、例えば、コードや方言やスタイル、語彙や統語の選択、音声的現象、慣用表現、会話の始めや終わりや連鎖を続ける機能などのことである（同：131)。会話では参与者同士の共起の予測（co-occurrence expectations）があり（同：162)、「コンテクスト化の合図」によって推測でやりとりが行われる。したがって、本稿では「コンテクスト化の慣習」とは、「解釈フレームを基盤として会話の参与者間に共有されており、会話の推測や共起の予測を可能にするもの」と定義する。

ミスコミュニケーションは、会話の参与者間でコンテクスト化の合図とコンテクスト化の慣習の結びつきや、その解釈の仕方が異なること、または、何を意味のあるcue（合図・手がかり）と見なすのかが異なることで発生する、と説明できる[註2]。言語の語用を相対的にみれば、言語ごとに感謝表現には多種多様な特徴と差異が存在する。非母語話者が日本語を習得する際には、語彙や文法だけではなく、日本語の解釈フレームとコンテクスト化の慣習の特徴に気づくことが重要であろう。次節では、感謝表現の先行研究の中から「後日の再感謝」に焦点を当てる。その上で、この発話行為の解釈フレームとコンテクスト化の慣習をどのように捉えることができるか検討する。

２－２.「後日の再感謝」の言語間比較

「後日の再感謝」が日本語で特徴的に使用されることについては、佐久間（1983）や西原（1994）などで指摘されてきたが、いずれも研究者の内省による記述であり、実証的な調査としては徳川（1993）と塩田（2012）のみである。

徳川(1993)は、1981～82年、日本の全国９都市[註3]の高校生を対象に選択式調査を行った。得られた回答数は1,113人で、調査内容は言語行動に関して質問20項目からなり、すべて選択肢式回答である。言語行動調査のうち「後日の再感謝」についての質問項目は以下である。

再会した時「せんだっては（いつぞやは）どうもありがとう。(お世話になりました。御馳走様でした。)」のような挨拶をすることがあります。あなたはそれをどう思いますか。以下の中からもっとも適切なものを選んで記入してください。以下以外にそれと匹敵するものがあったら（その他）欄に書いてください。 ａ．古い話を持ち出してベタベタした感じ。内容もあいまいで感じが悪い。 ｂ．謙虚すぎる。　ｃ．自分たちよりも年上の人たちのする習慣である。 ｄ．あたりまえの習慣で特に何も感じない。　ｅ．恩を忘れぬ礼儀正しい態度。

この項目の選択肢ａ～ｅがどのように設定されたのかについての記述は見当たらないが、選択肢ａの「古い話を持ち出してベタベタした感じ。内容もあいまいで感じが悪い。」には、要素が複数含まれている。「ベタベタした感じ」という表現は、「人間関係の距離が近すぎて、なれなれしい」と言い換えることができるだろう。「感じが悪い」理由には、「なれなれしい」ことと「内容があいまい」であることの二つが含まれている。調査の結果は日本全国で地域差は見られない（徳川1993：580）。さらに、韓国、台湾、タイ、フランスの４か国でも同じ質問紙調査が行われた。筆者は徳川（1993：594-595）のデータをもとに、日本の全国平均値を計算し、国際比較をするために海外データと共に図にまとめた（図１）。

日本の回答は「ｅ恩を忘れず礼儀正しい」が最も多く38％だが、「ｄあたりまえの習慣」(31％）と「ｃ年上の習慣」(18％）をあわせて「習慣」とする数は「礼儀正しい」を上回る。「ａベタベタ、あいまいで感じが悪い」(８％）と「ｂ謙虚すぎる」(４％）という否定的な解釈は少ない。一方、韓国とタイの回答は「ｅ恩を忘れず礼儀正しい」が過半数を超える（韓国63.5％、タイ65.5％）。韓国とタイでは習慣的な、単なる定型表現としての「挨拶」というよりも、感謝の意味として「重み」を持ち、話し手の態度を示すものとして肯定的に評価されていると分かる。これに対して、「ｄあたりまえの習慣」が最も多く、「ｅ恩を忘れず礼儀正しい」を超えているのが台湾とフランスである（フランス59%、台湾49.5％）。日本を含む５か国調査（徳川1993）をまとめると、「せんだっては（いつぞやは）どうもありがとう。(お世話になりました。御馳走様でした。)」と言うことに対して、「あたりまえの習慣」「年上の習慣」として自明視するか、「礼儀正しい」と話者の態度として評価するかは国によって異なっており、日本は「習慣」とみる率が高い。

この調査結果を参照または追試するにあたって注意すべき点を述べる。調査設計上では、選択肢ａ～ｅをどのような手続きで設定したのかが不明であること、また、有効回答率が不明で、結果の数値はパーセンテージのみでデータ実数が示されていないことなどだ（註４）。さらに、1981～82年に行われた調査であるため、2016年現在からすると「せんだって」「いつぞや」という語彙も古さが感じられるものとなっている。

塩田（2012）の調査は2012年１月に無作為に抽出された日本全国の20歳以上の男女2,000人を対象に行われたもので、有効回答数は1,338人である。調査方法は、調査員による個別面接聴取法である。言語行動調査と題して様々な項目が含まれており、その中に「だれかに会ったとき、最初に『このあいだはありがとう・先日はお世話になりました』などと、前回会った時のお礼を言う場合があります。このようなことについて、どう思いますか。」という「後日の再感謝」についての質問がある。後日の再感謝を「前回会った時のお礼」と規定し、「どう思いますか」と尋ねて、「必要」か「必要でないか」を軸に５つの選択肢から１つを選ばせている。その結果、「(ア）必要なことだと思う」が78.9％で「(イ）必要のないことだ」(4.5%）を大きく上回った。また、「(ウ）互いに親しい間柄では必要」が9.5％で、「(エ）互いに親しくない間柄では必要」(6.1%）よりもやや多い。ただし、塩田(2012）の質問では相手との関係について上下関係や親疎関係は示されず、なにより「お礼」をする対象が何か、相手の負担や恩恵の大きさはどうなのかという点が不明なため、結果の分析が困難である。

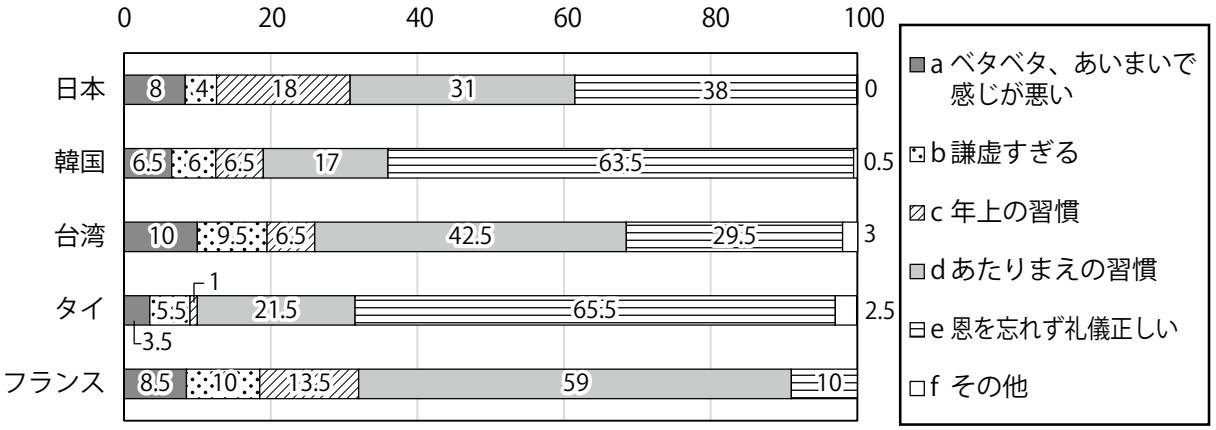

図１　「再会した時の感謝表現をどう思うか」全国平均と国際比較（徳川1993：pp.594-595を元に筆者作成）

「後日の再感謝」がどのような発話行為なのか、日本語と他の言語とを比較対照する視点で扱っている研究は多くはないが、英語との比較は中田（1989)、中国語との比較には施（2007）と李（2014)、他にはブラジル人日系社会を対象とした熊崎（1997）がある。

中田（1989）は映画やドラマから用例を収集し、日本語では「いつもお世話になっております」「その節はありがとう」などと社交辞令に近い挨拶で言っている例が多いが、英語では具体的な事へのお礼のみであることを示した。施（2007）は、中国語母語話者を対象に面接調査を行い、「ご馳走になった友人」に対して「先日はどうもありがとうございました」などのように、もう一度お礼を言うことについて質問し、再感謝の発話行為が否定的に受け止められると述べた。また、李（2014）は日中の母語話者26名ずつを対象にしたアンケート調査により、「中国語に再度の感謝は存在しているが使用頻度は日本語のほうが多い」とし、「何のために何回も感謝するのか、他人行儀に思われないのか中国語母語話者は疑問に思う」と述べている。熊崎（1997）はブラジルにおいて日系人同士または相手が非日系人かによって「後日ごちそうになったお礼」を言うかどうかアンケート調査を行い、「ブラジル人にお礼を言うことはもう一度ごちそうしてほしい、という意味だから日系人には言うが非日系人には言わない」という回答例を示した。これは日本人大学生への調査で「何も言わない」は183人中１人のみで「後日お礼を言うのは当然の礼儀として捉えられている」ことと対照的だという（熊崎1997)。

２－３．先行研究にみる「後日の再感謝」の解釈フレームとコンテクスト化の慣習

以上のように先行研究では、日本語母語話者が「後日の再感謝」に対して「恩を忘れず礼儀正しい」と見なす解釈フレームが示されている（徳川1993)。また、塩田（2012）の調査から「後日の再感謝」は「必要だ」というメタ認識が解釈フレームとして捉えられるだろう。選択肢式回答で明らかになることは全体的な傾向であって、質的な分析は行われていない。また、これが2016年現在においても変化していないのか不明である。さらに、どのような人間関係やどういった場面で使用するのかというコミュニケーションに関わるコンテクスト化の慣習については明らかになっていない。英語（中田1989）や中国語（施2007, 李2014）との対照研究からは「後日の再感謝」が日本語に特徴的な発話行為であることが推察され、したがって、日本語教育上、重視すべき語用であると思われるが、そのための十分な論考はこれまでなされているとは言えない。

３．研究目的と研究課題

本稿は日本語の「後日の再感謝」は日本語母語話者にとって、どのような発話行為だと考えられているのか、また、どのように使用されるのが適切だと考えられているのかを明らかにすることを目的とする。そのため、以下を研究課題とする。

研究課題１：日本語母語話者の「後日の再感謝」の解釈フレームはどのようなものか

研究課題２：日本語母語話者の「後日の再感謝」のコンテクスト化の慣習はどのようなものか

４．研究方法

研究課題１および２の研究方法として、東京にある大学にて質問紙による選択式調査と自由記述式調査を行った。調査は2014年10月から2016年８月にかけて断続的に行った。

調査協力者は大学に所属する日本語を母語とする大学生・大学院生の50人である。平均年齢は21.5歳で、年齢の幅は18歳から32歳であった。出身地は全国にわたっており、内訳は関東20人、東北８人、関西７人、北陸３人、中部３人、九州２人、四国２人、未回答４人で、関東出身者が20人とやや多い[註5]。

４－１．研究課題１について

日本語母語話者の解釈フレームを明らかにするために、2-2で分析した徳川(1993)の追調査を行った。対照言語研究で否定的な解釈が挙がっていたことを勘案し、李（2014）と施（2007）を参照して選択肢にｆとｇを追加した。ｆは「他人行儀で距離をとり相手を遠ざける」で、ｇは「水臭くて感じが悪い」である。質問項目を以下に示す。

日本語ではだれかに再会したとき、前回相手がしてくれたことに対して「このあいだはありがとう」「先日はお世話になりました」「先日はごちそうさまでした」などのような挨拶をすることがあります。

これらの言葉について、どんな感じがしますか。ａ～ｈの中からもっとも適切なものを一つだけ選んで記入してください。※これ以外のものがあったら「その他」に書いてください。

ａ．　ベタベタして（距離が近くて）いやな感じ。内容もあいまいで感じが悪い。
ｂ．　謙虚すぎる（ので、よくない）。
ｃ．　自分たちより年上の人たちのする習慣。
ｄ．　あたりまえの習慣で特に何も感じない。
ｅ．　恩を忘れぬ礼儀正しい態度。
ｆ．　他人行儀で、相手と距離をとり相手を遠ざける感じ。
ｇ．　水臭くて感じが悪い。
ｈ．　その他

質問紙による調査ではなく談話を分析する方法もあるが、会話の中で何がどのような合図であったのか、観察できる慣習が何か、会話の参与者が互いに何を期待しているのかについては、Gumperz（1982）も会話参与者と同じ社会的属性の者へのインタビューや議論された解釈をデータとしており、談話そのものの分析からは明らかにしていない。談話が行われた後でインフォーマントから話者の意図や聞き手の解釈を集める手法であり、この点で会話分析研究の手法とは異なる。社会文化的な解釈フレームやコンテクスト化の慣習に焦点を当てる場合には、話者や話者と同じ社会的属性の者から回答を得ることによって、それらの特徴が明らかになることの証左ではないかと考えるため、質問紙による調査を採用した。

４－２．研究課題２について

コンテクスト化の慣習を明らかにするために、自由記述で得られた回答をデータとし、川喜田（1970：48-65）の手順に従ってKJ法を行った。質問項目を以下に示す。

あなたは人と再会した時に、これらのお礼の言葉を使いますか。使う場合と使わない場合で相手との関係や状況によって違いがあれば教えてください。

KJ法を採用した理由は、仮説生成型の方法であり、質的に多様なデータを対象にすることができるためである。KJ法は質的研究方法であるが、研究者の内省とは異なり、データを先験的な予断や専門知識を排して観察し記述することが可能になる。「データそれ自体をして語らしめる」こと、つまり「個別的現象から一般的な秩序の発見」を志向し、現状把握や問題提起を目的とする（川喜田1970）。そのため、一見すると偶発的で主観的に見えるデータも、量的調査のように捨象されることなく同等に検討することができる。KJ法の手順は⑴記述内容を紙片に記す「一行見出し」作り、⑵グループ編成、⑶グループの「一行見出し」とグループ間の「島どり」、⑷インデックス図解作成、⑸図解の文章記述へと段階的に行われる。手順としては、まず、「一行見出し」で記述データを観念的に書き換えたり意味を拡大したりすることなく簡潔に記す。複数の異質の内容を含む記述については分割して一行見出しにする。次に「グループ編成」で内容の似たものを小グループから大グループへと編成していく。「インデックス図解」で前段階のグループの見出しが見えるように解体して輪で囲み、多重多角的な構造に開き、関連するものを線や矢印でつないで図解する。最後にデータの言葉を活かして文章化する。

５．結果

５－１．研究課題１：日本語の「後日の再感謝」の解釈フレーム

選択式回答の結果を表１と図２に示す。日本語母語話者の選択は1981～82年の調査と比べると「ｅ恩を忘れず礼儀正しい」(40％）よりも「ｄあたりまえの習慣」(50％）がやや多くなっているが、ｅとｄがかなりの割合を占めている点に変化はなかった。今回の調査で追加した「ｆ他人行儀で距離をとり、相手を遠ざける」を選んだ者

は１人いた。「その他」の記述には、「人間関係を円滑にし、話を始めるのにちょうどよい定型句」「習慣」、「親しみが増す感じ」が挙がった。否定的な解釈である「ａベタベタした感じ。内容もあいまいで感じが悪い」、「ｂ謙虚すぎる（のでよくない）」、「ｇ　水臭くて感じが悪い」を選択したものはおらず、徳川（1993）同様に、総じて肯定的に捉えられていることが分かった。

表１　再会した時の感謝表現をどう思うか

選択肢	回答数	%
ａ　ベタベタ、あいまいで感じが悪い	0	０％
ｂ　謙虚すぎる（ので、よくない）	0	０％
ｃ　年上の習慣	1	２％
ｄ　あたりまえの習慣	25	50%
ｅ　恩を忘れず礼儀正しい	20	40%
ｆ　他人行儀で距離をとり相手を遠ざける	1	２％
ｇ　水臭くて感じが悪い	0	０％
ｈ　その他、未回答	3	６％
計	50	100%

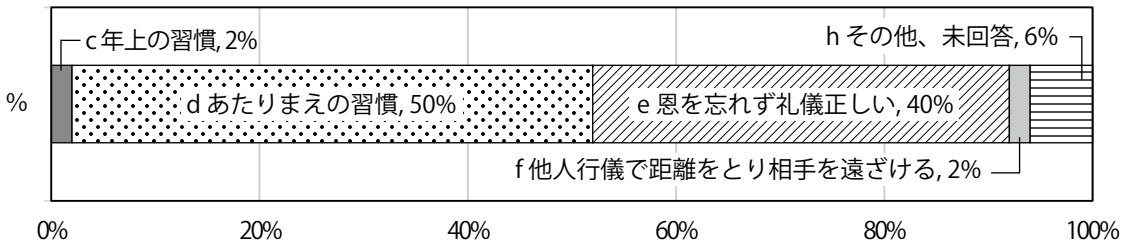

図２　再会した時の感謝表現をどう思うか

５－２．研究課題２：自由記述回答にみる「後日の再感謝」のコンテクスト化の慣習

KJ法の最初の段階で記した「紙片」は80枚あり、「グループ化編成」は三段階行った。完成した「インデックス図解」を図３に示す。

日本語母語話者は、「後日の再感謝」についてどのように使用するのか。KJ法にしたがって図解の中の言葉を［　］で記し、対応する番号順に以下で文章化する。

まず、⑴［どのような相手、状況であっても言う］ことが大多数で、［相手が年上でも年下でも］、家族や親しい友人でも関係なく、［忘れていない限り必ず言う］。［親しい人であっても感謝の言葉を伝えることは大切だ］からだ。［相手が留学生や外国人でも気にせず］使い、［習慣としてよく使う］。しかし、⑵［時間が経っていたり、メールしていたら言わない］。［親しい友人にはメールでお礼を済ませる］ようにしていたり、［目上の人に物をもらったりおごってもらった時はメールでお礼をするから言わない］ようにしていることもある。再感謝は［一度だけする］ようにしていることもある。⑶お礼する対象の［金額や労力や内容］にもよる。［金額や労力が大きければ言う］。また、［おみやげやお菓子などの物をもらったら言わない］ことや［私にとってよかったと思う時に言う］こともある。⑴［相手とどのような関係でも言う］のではなく、⑷［目上には言う］ようにしていて、［毎日会うような親しい友人や家族には言わない］場合も多い。［友人が課題を手伝ってくれ］るなどの労力が大きい場合は言うが、［友人がしてくれたことの程度が軽かったら言わない］場合もある。日本語母語話者が⑴［どのような相手や状況であっても］［習慣としてよく使］い、⑵［目上の人には言うようにしている］のは、後日の再感謝の言葉が⑸［話しかけたり話し始める時に使］い、［親しくない相手とのコミュニケーションの入り口］になるような［話すきっかけ］が作れる言葉だからで、お礼の言葉は［円滑な人間関係を築くために重要だ］と考えるからだ。

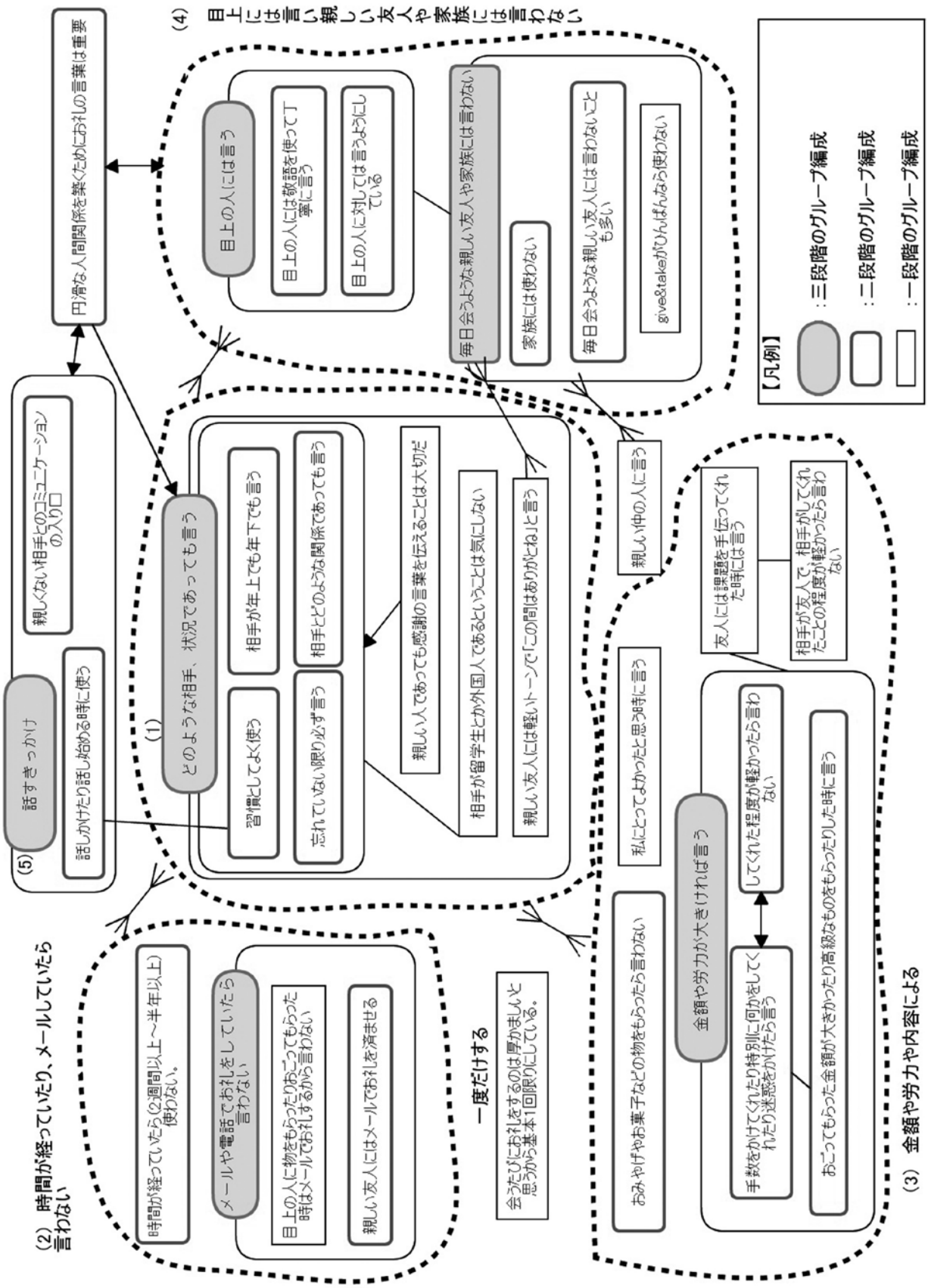

図３　日本語母語話者による「後日の再感謝」のコンテクスト化の慣習

〈記号の意味〉 ―――：関係あり、 ――→：（生起の順や因果関係）、 ←――→：相互に因果的、 ≻――≺：反対

6．まとめと考察

「このあいだはありがとう」や「先日はごちそうさまでした」などの再会の際の感謝表現について、徳川（1993）の調査を追試したところ、日本語母語話者には「あたりまえの習慣」という解釈フレームがあることがわかった。日本語母語話者のコンテクスト化の慣習については、「このあいだ」「先日」を取り立てて、繰り返し感謝の気持ちを伝えることが「円滑な人間関係を築くために重要」と考えられ、人間関係を築く「習慣」「定型句」として使用することがわかった。すなわち「後日の再感謝」は円滑な人間関係を築こうとしているというコンテクスト化の合図であるとも言えよう。だからこそ「話すきっかけ」として「話しかけたり話し始めたりする時に使う」という談話上の機能ももっている。日本語の感謝表現全般の談話上の機能について検討した先行研究は、中道・土井（1994）があり、それによれば、感謝表現は感謝を表明するものだけでなく、「談話の運用に関わるもの」がある。すなわち、「⑴接触の開始　⑵接触の終了　⑶話題の開始　⑷話題の収束」の方略として使用される。感謝表現がそのような談話上の機能で用いられる場合、コンテクスト化の合図になっていると捉えることもでき、「後日の再感謝」は感謝表現の「機能」としての特徴を例証していると言えるのではないだろうか。

「後日の再感謝」をどのような人間関係で使用するのかについては、「親しい友人や家族には言わない」「金額や労力にもよる」と回答するものと「相手との関係や状況に関わらず、誰にでも言う」と回答するものに分かれた。後者の背景には、「親しい人であっても感謝の言葉を伝えることは大切だ」という日本語母語話者の解釈フレームがあると指摘できる。

以上のように、「後日の再感謝」は、日本語を母語とする現代の若者にもよく使用されており、コンテクスト化の慣習として機能していることがわかった。その一方で、日本語を母語としていない者はこの発話行為のメタ認識である解釈フレームを必ずしも共有していないことが先行研究から見てとれた。日本語教育の現場や異文化交流においてミスコミュニケーションを防ぐためにも、さらなる対照言語研究の知見が蓄積される必要がある。また、Gumperz（1982）が言うように解釈フレームやコンテクスト化の慣習が動的なものであるのならば、話者間で調整され、変容することも分析の対象に含めなければならない。今後の課題としたい。

【註】

1．フレームの概念による談話分析にはDeborah Tannen (1993) *Framing in Discourse*などがある。

2．Gumperz (1982) が挙げた事例では、イギリスでインド人従業員が不愛想で非協調的だとみなされていたのは、インド人従業員が使用した下降イントネーションがイギリス英語ではcue（合図）になり、「無礼」と結びついていたからだという（同：173-174）。他の例では、黒人の生徒が使用した“I don’t know” “I can’t do this”（cue）を白人の教師は「拒絶」「家庭で就学準備の教育を受けていない」と解釈したが、黒人グループは「私を励ましてほしい」「話し相手になってほしい」というストラテジーと解釈した。

3．青森、宮城、神奈川、静岡、岐阜、大阪吹田市、大阪高石市、鹿児島市、沖縄の９都市で行われた。

4．その他には、日本は全国９都市でサンプリングを行っているが他国でサンプリングした都市が不明であること、選択肢の「ｆその他」の回答が国際比較において若干見られるがその内容は記されていないこと、さらに、回答者が全世代ではなく若者である高校生を対象としていることが結果に影響を与えている可能性にも留意しなければならない。

5．協力を依頼する際には研究倫理を順守し、回答者の不利益にならないことを誓約した上で了承を得、無記名にて行った。なお、学生の専攻は経済学、商学、歴史学、法学、社会学、教育学など文系を中心に多岐にわたる。また、先行研究では感謝表現の使用に男女で有意差がある結果が見られなかったことから本調査では性別の記述を求めなかったが、協力者は女性７割、男性３割程度であった。

【参考文献】

Goffman, E. (1974) *Frame Analysis: An Essay on the Organization of Experience*. Northeastern University Press.

Gumperz, J. (1982) *Discourse Strategies*. Cambridge University Press.

川喜田二郎（1970）『続・発想法』中央公論新社

熊崎さとみ（1997）「ブラジル人の言語行動『後日お礼を言うこと』について日系人を中心に」『ことばの研究』09, 14-24.

佐久間勝彦（1983）「感謝と詫び」水谷修編『話しことばの表現』筑摩書房
施晖（2007）「再感謝表現についての日中比較」『中國學研究論集』第19号，108-100，広島中国学学会
塩田雄大（2012）「現代人の言語行動における“配慮表現”～『言語行動に関する調査』から」『放送研究と調査』2012年７月号，NHK放送文化研究所，66-83.
徳川宗賢（1993）『方言地理学の展開』ひつじ書房
中田智子（1989）「発話行為としての陳謝と感謝―日英比較―」『日本語教育』68号，191-203，日本語教育学会
中道真木男，土井真美（1994）「日本語教育における感謝の扱い」『日本語学』13巻８号，47-54，明治書院
西原鈴子（1994）「感謝に関する一考察」『日本語学』13巻８号，４-９，明治書院
李華勇（2014）「日本語と中国語における『感謝の言語行動』の対照研究」（未公刊　大阪大学言語文化研究科博士論文）